

「また、やってみたい」という魅力

「四季折々の美しさに身をゆだねる魅力」



西澤孝仁さん、由香さん（梅高）

5月、8月にもこの場所でカヌーを楽しみました。新緑、鳥の鳴き声、紅葉など、季節ごとの自然の美しさを湖面から眺めるのは格別ですね。めったにできない経験だと思います。周りの人にも勧めたい魅力です。

「風の流に身を任せるのもいいですね」



筑地美帆さん（小長井）

初めてのEボート楽しかったです。濡れることなく水の上から景色を眺められるし、こいでいるので寒さもそれほど感じません。疲れたら風の流に身を任せても気持ちいいですね。こういった体験があれば、また参加したいです。

「素晴らしい環境をみんなに知ってほしい」



神田優一さん（千頭）

初めてカヌーに乗りました。湖面に浮かぶと、普段見ている景色がいっぺんに変わりますね。かなり爽やかな気分です。自由自在に動けるし、自然にも優しい。こんな素晴らしい環境があることを、もっとみんなに知ってほしいです。

多くの人が体感できる町へ

教室&ツーリングが終わった後の参加者からは「普段とは違う景色に目を奪われました。周りの人にも勧めたいですね」という感想が聞かれた。朱澄さんはカヌーの魅力について次のように語る。

「カヌーは水上スポーツ。普段とは違う目線の高さですから、陸の上からでは分からない景色の違いを発見・体感できるのが楽しいんです。スポーツとしてだけでなく、レジャーとしても楽しめるカヌー。もっとたくさんの人に、その魅力を感じてほしいし、そのため実際に乗ってほしいですね」。

わかふじ国体の開催から8年。「カヌーの町」を標榜したこの町は、どのくらいその方向性を進めてくれただろうか。

どれほどの人がカヌーに触れ、その魅力を実感してきたのだろうか…。

一人でも多くの町民が、一回でも多くカヌーに触れる機会を設け、その魅力を実感する。愛好者の輪をさらに広げていく。町外の愛好者とも交流を図っていく。そんな機会を、今後も数多くつくり出していくことが大切だろう。

B&G海洋センターでは数人のグループなどを対象とした「カヌー出前教室」を実施している。職員が丁寧に乗り方を手ほどきし、艇の貸し出しにも応じている。この町には、未経験者でも気軽にカヌーに触れる機会がある。水の上を楽しむ環境がある。そういった地道な活動の積み重ねが、「カヌーの町」定着への、確実な足跡となっていくはずだ。



バイキングカヤックジャパンが主催するフィッシングカヌーの試乗会が11月中旬、接岨湖周辺で開催された。カヌーと釣りの魅力を融合する試み。艇は競技用と違って安定性に富み、中の水をかき出しやすいなどの配慮もなされた設計。漁協の許可を得て実施された試乗会では、接岨湖から関の沢まで約1時間のクルーズと釣りを楽しんだ。会に参加した商工観光課岡井佳仙課長は「釣りとかヌーの融合は新しい発想。ここのをやめれば静寂が訪れ、バードウォッチングにも最適。環境にも優しいため、これから主流になっていく可能性もある」と話していた。

つながるもう一つの可能性 「川根高等学校」 若い世代がカヌーに打ち込む環境がここにある

平成10年創部・インハイ初代王者



▲川根高校カヌー部女子の「インターハイ優勝」を祝って町議会から贈られた盾
▶平日の川根高校カヌー部。冬季は主に体力向上を目指して、バーベル上げなどの筋力トレーニングに励んでいる

川根高校カヌー部は平成10年に誕生した。わかふじ国体を5年後に控え、地元高校から選手を送り出そうという目的で創部された。

当初練習場が確保できず、静岡市の巴川などへ出向いて練習した。しかし行き来に時間がかかり過ぎるため、練習場を確保すべく各方面と折衝を重ねた。その結果、平成13年から接岨湖での練習が可能となった。

日本を代表するカヌー選手池住秀夫コーチ（のちの顧問）の指導の下、練習中だけでなく、日頃の健康管理にまで気を配ることで、部員たちの身体能力、競技力はめきめきと向上していった。わかふじ国体の開催に前後して、全国の高等学校でカヌー部を創設する動きが加速。平成18年、インターハイ（全国高等学校総合体育大会）に「カヌー競技」が加わった。川根高校カヌー部は、並み居る強豪を抑えて決勝に進出し、見事初代チャンピオンに輝いた。

部の現況・展望を池住顧問に聞く

池住 現在、カヌー部には8人が在籍

籍。3年生が引退したため、1年生5人、2年生3

人で活動しています。昨

年は井澤一彰がインターハイや国体で入賞するなど大きな成績を残しました。現在、その穴を埋めようと、下級生が必死で取り組んでいます。

しばらくの間、朱澄さんがカヌー部の練習に参加してくれました。積極的な部員は「ここはどうしたらいいですか」と質問していました。から、いい刺激になったようです。

朱澄さんが在籍していた頃のカヌー部はガッツがありました。朱澄さんだけでなく、他の部員もやる気に満ちていましたね。だからこそ、インターハイ初代王者という栄冠につなげたんだと思います。そういった偉大な先輩がいたことを忘れないよう、当時のメンバーが寄せ書きしたインターハイの「のぼり旗」を、今も艇庫に飾ってあります。

何のスポーツでもそうですが、「趣味」と「競技」では大きな違いがあります。強くなるためには「楽しい」だけではだめ。厳しい練習も必要です。つらさやきつさを経験して、やりがいや魅力を実感できるように



川根高等学校カヌー部顧問 池住秀夫さん

なつて初めて成長できる。その道で大成しようと思ったら、少なくとも10年かかるのではないのでしょうか。ですから高校の3年間はステップアップの途中段階。本格的にカヌーを始め、競技力を伸ばす。そしてここから大学などに進んでさらに高みを目指す。そうやって大きな舞台へ羽ばたいていくための通過点でもあるんです。井澤一彰は日本大に進むことが決まりました。本人がどこまで頑張り通せるか未知数ですが、やりきれれば大化ける可能性もあり、今から楽しみにしているんです。

小・中学校でカヌーを体験した子が「またやりたい」と思った場合、この町には川高カヌー部があります。ここがカヌーを始めるきっかけになったり、通過点になったりします。他県では中学からカヌー部がある学校もありますから、決してここが恵まれていたとは言いませんが、県内の高校でカヌー部があるのはうちと焼津水産だけ。ほかの市町にはない大きな強みだと思っています。